石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事 業 報 告 書

第 15 巻

平成 29 年度

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

巻　頭　言

本学では、近隣の住民の方々がキャンパスにお見えになり、その準備・案内や目的とする事業を学生たちが主体的にいそいそとやっているという姿が当たり前のように展開されています。これは、本学が大切にしてきた地域に根ざした大学になるという考えを土台にして開学時から地道に活動を続けてきたことが表れているものと考えられます。

本学の当初からのこの方針を体現しているのがこの地域ケア総合センターです。このセンターは、学生・教員の両者が看護教育に必須の地域生活に関する具体的知識を学ぶ拠点であり、また大学の知を地域に還元するための拠点でもあります。広く石川県という枠で地域を捉え、県下の人材や施設との交流も積極的に行なってまいりました。

地元かほく市とは平成 22 年に連携包括協定を結び、それ以降加速度的に結びつきが強くなっています。昨年に続き、今年度もイオンモールウォーキング事業に多数の教員が参加し、地元住民の冬場の健康増進に一役買いました。また地域包括ケアシステム時代に向けて、奥能登地域の住民の方々の健康課題への本学の貢献可能性を見出すために能登地域での聞き取り調査を行ない、平成 30 年度からの能登枠事業の開始の準備を整えたところです。そのほかに、教員の個別の専門性による子育て支援、保健室登校児の支援、限界集落住民支援、特定地域の健康づくり支援等、主に津幡以北の地域で多くの事業を絶え間なく行いました。また、病院の看護研究支援も精力的に行なっています。このようにセンターでは社会の状況に合わせて地域や医療施設の需要に応じて学生や教員を派遣したり、大学を会場として活動を行なっています。

近年、まち・ひと・しごと創生法成立を契機に大学にも地方創生への役割発揮が求められています。本学のような小さな大学も平成 27 年に文部科学省が採択した COC+事業「金沢・加賀・能登で地域思考型教育による夢と志を持つ人材養成」の一員として地方創生に貢献すべく歩み始めています。さらに本学では“地方創生”よりもっとミクロな“地域創生”に目を向け、学生が地域（そこがどんな辺鄙な場所であろうとも）で暮らすことの意義を知り、いつかそれを支え工夫する看護職になってくれるものとの期待も込めて積極的に学生が地域に出る事業を取り入れています。

この報告書で平成 29 年度にどのような活動があったかをご覧いただき、このセンターの活動に対する要望や忌憚のないご意見をうかがえれば幸甚に存じます。

石川県公立大学法人　石川県立看護大学
学長　石垣和子

地域ケア総合センター「事業報告書（第 15 巻）」発刊に寄せて

日頃から地域ケア総合センターのさまざまな事業にご協力いただきありがとうございます。

この度、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの事業報告書（第 15 巻）を発刊する運びになりました。地域の皆さまにはご一読いただき忌憚のないご意見やご要望をいただければと思います。

さて平成 29 年度も地域ケア総合センターでは従来どおり「人材育成」、「地域連携・貢献」、「国際貢献」の３本柱でさまざまな事業を展開してまいりました。

専門職研修としては「つながる・ささえる・つくりだす在宅療養移行支援」と題した事例検討会と講演会を行い、「住み慣れた場所でいつまでも生活できる支援」を創りだすことの重要性を改めて認識する貴重な機会となりました。

地域連携・貢献事業では、昨年度に引き続き、「か歩く健康ウォーキング事業」をかほく市、イオンモールかほくと連携する形で取り組むことができ、モールレッスンには昨年度以上に多くのかほく市民の方々にご参加いただきました。

国際貢献事業のうち、JICA 青年研修ではタイから 14 名の研修生を受け入れました。本学で地域保健医療に関する基礎的な知識について講義を受けた後、石川県庁、一次医療、二次医療、三次医療の施設、保健所、予防医学協会、かかりつけ薬局等の視察を通し、地域保健医療について多くを学びました。

これ以外にもさまざまな事業を開催し、多くの皆さまに足を運んでいただけたことを本当にうれしく思います。各事業の詳細については各報告をご覧いただければと思います。

地域ケア総合センターでは臨床現場や関係機関、自治体のニーズと大学教員の研究テーマをより明確にマッチングさせて事業を展開していきたいと考えています。

今後とも地域ケア総合センターの各事業にご理解とご協力をお願い申し上げます。

地域ケア総合センター長　武山雅志

目　　次

(ページ)

1　人材育成事業
1-1　専門職研修
1-1-1　喀痰吸引等研修事業「指導者フォローアップ研修」 1
1-1-2　グリーフの理解とナースに求められること 2
1-1-3　つながる・ささえる・つくりだす在宅療養移行支援 3
1-1-4　訪問看護師と介護老人保健施設看護職員のためのフィジカルアセスメント 4
1-1-5　ベッドサイドで役立つ臨床推論 ー症状・フィジカルから検査までー 5
1-2　本学教員主催の研究会・事例検討会
1-2-1　ジェネラリストのための事例検討 6
1-2-2　ペリネイタル･グリーフケア検討会 7
1-2-3　子育て支援・虐待予防に関する勉強会 9
1-2-4　がん看護事例検討会 10
1-3　相談サービス事業
1-3-1　各種研修会等への講師派遣事業 12
1-3-2　病院への事例・活動・研究等の指導助言実施状況（再掲） 14

2　地域連携・貢献事業
2-1　地域連携事業
2-1-1　来人喜人（きときと）健康創りプロジェクト事業 15
2-1-2　健康応援倶楽部･健康増進モデル事業 16
2-1-3　「ワクワク健康サークル」活動 17
2-1-4　棚田が織りなす食･緑･健康の郷づくり 18
2-1-5　モールウォーキング事業 19
2-1-6　かほく市子育て支援学生ボランティア事業 20
2-1-7　災害につよい街づくり事業 21
2-2　生涯学習講座
2-2-1　あかちゃんをお空にみ送った方の自助グループに対するサポート活動 23
2-2-2　どろっぷ・いん・さろん 25
2-3　ワンストップサービス事業 26

3　国際貢献事業
3-1　JICA 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース 27
3-2　JICA 青年研修「地域保健医療実施管理」コース 30

4　その他
4-1　かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み 35

1　人材育成事業

1-1 専門職研修

１－１－１　喀痰吸引等研修事業「指導者フォローアップ研修」

１．事業の目的

特別養護老人ホームはじめ介護保険施設等で勤務する介護職員の方々が喀痰吸引・経管栄養の「医療的ケア」の実施を支援できる指導者養成講習会を開催するようになり 6 年が経過した。石川県では約 500 名の指導者（ほぼ看護師）が修了証を獲得されている。指導者が常に新しい知識を根拠に自分の技術や指導方法をブラッシュアップできるようフォローアップ研修を企画した。

２．実施状況

実施場所：石川県立看護大学基礎看護学実習室
参加者数：看護師・教員、感染管理認定看護師計 72 名
（受講者 48 名、講師 8 名、運営スタッフ 16 名）
※参加費 500 円/人徴収（500 円×48 名　計 24,000 円）

３．実施内容

・テーマ：医療的ケアが必要な要介護高齢者のアセスメントと喀痰吸引等の技術のブラッシュアップ
・内容：
Ⅰ部　老年期の新たなとらえ方と全体像を理解すること　（講師 川島和代）
老年期のフィジカルアセスメント（認知症のある人の栄養アセスメントを中心に）
（講師 北山礼子）
Ⅱ部　喀痰吸引等を実施する際の感染管理
－教育 DVD 吸引処置時感染防止対策視聴吸引処置時の感染対策の注意点－
（講師 嶋田由美子、池田恵子、架間ゆき子、小森幸子:感染管理認定看護師）
Ⅲ部　喀痰吸引の指導方法の変更点と具体的な留意事項　（講師 干場順子　他）
経管栄養の指導方法の変更点と具体的な留意事項　（講師 神戸敏子　他）

４．評価と今後の課題

受講生と運営スタッフの計 64 名のアンケート結果から満足 73%、やや満足 23%の回答が得られた。また、参加動機も「自己の指導力向上を期待して」がもっとも多く、次いで「自己の指導を振り返りたい」との回答が多くみられ、研修参加者のニーズにあった企画であったと評価できる。

また、研修対象者は施設等で勤務している看護師が多く、同じ施設から一度に複数参加は難しいことが伺えた。年に複数回の開催を望む声も有り、今後の課題である。石川県社会福祉協議会　福祉総合研修センターとの連携を模索したいと考えている。

１－１－２　「グリーフの理解とナースに求められること」

１．事業の目的

がん患者およびその家族へのグリーフケアに関する研修を実施し、グリーフケアについての知識を高める。

２．実施状況

講　師：モナシュ大学　看護・助産師学科　講師
　　下稲葉　かおり　先生
テーマ：グリーフの理解とナースに求められること
日　時：平成 29 年 7 月 2 日（日）13：00～15：00
場　所：石川県立看護大学　大講義室
対　象：看護職者の方、看護学生
主　催：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター
共　催：超少子高齢化地域での先進的がん医療人養成（北信がんプロ）

３．実施内容

参加者は 89 名であり、北陸 3 県全てから参加者があった。公開講座終了後のアンケートは 80 名から回答があり、「自分にも今出来るケアがあることが分かり、気持ちが楽になった。」「ケアを続けるために、自分たちもケアしケアされなければいけないと感じた。」「この講演そのものが癒しになった。」との意見が聞かれ、ほとんどの方がこの講演に満足したと回答されていました。

多くの看護職者、ならびに看護学生にとってグリーフとは何かを学び、それに携わる者としてのセルフケアの必要性や遺族との関わり方について考える機会になったものと考える。

４．評価と今後の課題

がんのみならず、周産期においてもグリーフケアは重要であり、今回の企画の内容に対して参加された方は、非常に熱心に聴講していた。

今後は、北信がんプロにて本企画を継続していきたい。今後は、2 日にわたり十分時間をかけて実施する必要がある。

１－１－３　つながる・ささえる・つくりだす在宅療養移行支援

１．事業の目的

病院看護師が在宅で療養生活を送る患者とその生活を支える地域の方々の支援への理解を深め、在宅療養移行支援のあり方を再認識することを目的とする。

２．実施状況

日　時：平成 29 年 7 月 1 日（土）　10：00～15：00
場　所：石川県立看護大学（大講義室）
総合司会：石川倫子（石川県立看護大学　附属看護キャリア支援センター　准教授）
事例検討会『病院と地域との連携を考える』（10：00～12：00）
座　長：出口まり子（石川県立看護大学　附属看護キャリア支援センター　特任講師
前芳珠記念病院　看護局長）
助言者：秋山正子（(株)ケアーズ・白十字訪問看護ステーション）
事例提供者：倉下　陽子（石川県立中央病院　退院支援看護師）
池田　玲子（芳珠記念病院　ほうじゅ連携室療養支援課　看護師長）
澤　久美子（白山鶴来訪問看護ステーション　管理者）
講演会（13:00～15:00）
『つながる・ささえる・つくりだす在宅療養移行支援』
講師：秋山正子（(株)ケアーズ・白十字訪問看護ステーション）
参加者：141 名

３．実施内容

本学地域ケア総合センターと石川県在宅療養移行支援研究会の共催で、「つながる・ささえる・つくりだす在宅療養移行支援」を開催し、病院看護師をはじめ地域で活躍する看護師など 141 名の方が参加した。事例検討会では、「病院と地域との連携を考える」と題して、事例提供者の方々に事例を通して具体的な連携を報告してもらった。具体的には急性期の病院から回復期の病院へとつなぐ事例、回復期の病院での急性期の病院からの引継ぎおよび訪問看護ステーションへとつなぐ事例、訪問看護ステーションでの急性期の病院、回復期の病院との連携事例を通して、その人の意思を大切に、その人がその人らしく最期まで生ききるための支援を考えた。講演会では、秋山正子先生から「つながる・ささえる・つくりだす在宅療養移行支援」と題して、ご講演をいただいた。秋山先生の「暮らしの保健室」「マギーズ東京」「坂町ミモザの家」での看護活動を聞き、「住み慣れた場所でいつまでも生活できる支援」「自分を取り戻す居場所」を創りだしていくことが重要であることを改めて認識した。先生のご講演で参加者一人ひとりが、「明日からできること」「やってみようというエネルギー」とその人の意思を大切にした在宅療養移行支援への大変貴重な示唆を得た。

４．評価と今後の課題

参加者は、事例検討及び講演をとおして、退院支援と退院のタイミング、看―看連携、様々な場での多職種との情報共有、療養者への意思決定支援と意思の尊重について理解を深め、自ら考え創りだす支援の方向性をつかめたと考える。今回は、医療が充実した地区での在宅療養移行支援を取り上げた。今後は地域医療（へき地医療）を担う臨床現場の看護師とともに実現・継続可能な在宅療養移行支援を創りだす場を提供していく。

１－１－４　訪問看護師と介護老人保健施設看護職員のためのフィジカルアセスメント

１．事業の目的

１）訪問看護・介護老人保健施設現場で活かせるフィジカルアセスメントの知識と技術を習得する

２）訪問看護・介護老人保健施設現場での「高度看護実践看護師：NP(ナース・プラクティショナー)」の実践知を学ぶ

２．実施状況

・日　時：2017．8.19（土）10:30―16:00
・場　所：本学基礎看護実習室
・講　師：医療法人　別府玄々堂　上人病院　　光根　美保先生（NP）
・ファシリテーター：石川県立看護大学　　林一　美、山﨑智可

３．実施内容

１）実施内容：フィジカルアセスメントに関する講義と演習

２）参加者：33 名（訪問看護 19 名、介護老人保健施設 10 名、グループホーム 1 名、特別養護老人ホーム 1 名、病院 1 名、不明）であった。

３）参加者の職場所在地：金沢市 10 名、七尾市 7 名、かほく市・小松市・能美市各 3 名、津幡町 2 名、かほく市・穴水町・珠洲市各 1 名であった。

４）講義内容：良くわかった 11 名（34%）わかった 13 名（41%）、おおよそわかった 8 名（25%）
演習内容：とても良かった 17 名（53%）、良かった 12 名（38%）、おおよそ良かった 2 名（6%）、不明 1 名

５）今後の看護活動の活用：参考になった 32 名（100%）

４．評価と今後の課題

本年度事業は、対象施設を従来の「訪問看護事業所」だけでなく「介護老人保健施設」に拡大した。その結果、12 名の「介護老人保健施設、グループホーム、特別養護老人ホーム」の看護職の参加があった。また、能登北部・中部地区からも 9 名の参加があった。PR については、事前に関連施設宛に開催案内を郵送したことが参加者増加につながったと思われる。本企画は、受講者の評判もよく、医師の少ない現場における看護職のスキルアップの側面からも継続が必要である。

１－１－５　ベッドサイドで役立つ臨床推論 －症状・フィジカルから検査まで－

１．事業の目的

第一線で活躍する看護師にとって、患者の自覚症状とバイタルサインを含めたフィジカル所見に加えて、患者の検査データをアセスメント出来ることはより良いケアを提供する上で大きな助けとなる。この観点から、昨年度に引き続き、「ベッドサイドで役立つ臨床推論」と題して下記セミナーを行った。

２．実施状況

日　時：平成 29 年 9 月 30 日（土）13:00～16:00
講　師：多久和　典子
場　所：図書館 2F　ガンバルーム
内　容：第 1 部　血液検査の講義
　　第 2 部　症例検討（臨床推論）
参加者：7 名（病院勤務看護師・看護学校教員・本学若手教員）

３．実施内容

１）講義

血液検査（血算・血液像、血液生化学）、尿検査等についての基本知識を講義した。

２）事例検討（臨床推論）

さまざまな事例について、自覚症状、バイタルサイン、身体所見に加えて検査所見を総合したアセスメントのグループワークによる演習を行った。

４．評価と今後の課題

特に事例検討のグループワークについて、面白かった、また聞きたいと好評を頂いた。アンケートの自由記載では、医師からの指示をただうけるだけでなく、どんな根拠、目的のもとに指示をだしているのか、意識しながら少しずつ考える訓練をしていきたい、レントゲンや CT も併せて見ながら勉強になった、実践に役立つと感じた、学校の教員をしているので授業の参考にしていきたい、との多くのコメントを頂いた。

臨床推論は敷居が高く感じられ、参加を躊躇される方が多いのではないかと拝察される。しかしながら、我が国でも今後活躍が期待される NP には必須の思考過程である。地域の看護職の皆様に臨床推論への興味や親しみを感じて頂けるように、このセミナーが少しでも貢献できれば幸いである。

１－２ 本学教員主催の研究会・事例検討会

１－２－１　看護実践向上セミナー「ジェネラリストのための事例検討」

１．事業の目的

急性期から長期療養介護等において、患者が早期に在宅へ生活復帰できるよう的確な看護判断と適切な支援のためにジェネラリストとしての看護実践力の向上を支援する。

２．実施状況

第１回　日時：平成 29 年　 7 月 23 日（土）　13:30～16:00
第２回　日時：平成 29 年　11 月 25 日（土）　13:30～16:00
チューター：中田　弘子　　川島　和代　（石川県立看護大学）他
主　催：看護科学研究学会 北陸研修会 いしかわ学習会
後　援：石川県立看護大学地域ケア総合センター

３．実施内容

第１回の参加者は県内の看護職 52 名であった。検討事例は、【成人期で仕事をしながら通院加療中であるが、難病・長期慢性疾患の合併症の進行により急性憎悪が予測されるため、即時対応が迫られる事例 A】であった。グループワークと発表及びフィードバックでは、身体的な細胞・器官レベルから社会関係までの問題を捉え直し、看護の方向性を見いだした。参加者のアンケート結果では、満足 74%、やや満足 23%、今後の看護実践に活かせる 87%、やや活かせる 10%であった。事例提供者からは、「支援していたつもりだったが、患者の実像が見えていないため十分支援できていないことに気づいた。直ぐにチームカンファレンスを行い、次回受診時に早速対応したい。」との意見が聞かれた。

第２回の参加者は県内看護職 49 名であった。提出事例は３事例であり、【独居の前期高齢期で骨接合術後に自宅退院の方向であったが、対象と医療者との認識にズレが生じた A 事例】、【慢性疾患と精神疾患を持ち、低栄養状態と筋力低下により転倒をくりかえしながら外来通院中で、家族は多重課題を抱える前期高齢期の B 事例】、【経費老人ホームに暮らし、認知機能の低下、食事のコントロール不良等による症状悪化より入退院をくりかえす C 事例】であった。参加者の希望によりグループ配置し、グループワークと発表および全体へのフィードバックを行った。参加者のアンケート結果では、満足 56%、やや満足 37%、今後の看護実践に活かせるは 100%であった。事例提供者の気づきの発言では、「アセスメント不足とアセスメントした内容を看護実践に活かせていないことに気づいた」、「対象の身体だけでなく心、社会、これまでの生活過程等の全体像を掴むことの重要性が再認識できた」などが挙げられた。

４．評価と今後の課題

今年度提出された４事例中３事例は、臨床現場において対応が困難な事例であったが、いずれも解決に迫られていた。そのような臨床からの要望に応えるために、1 回の研修において３事例を検討したが、グループワーク発表では他の事例の検討内容の共有は不十分となった。今後、事例が複数の場合では、参加者の理解度や満足度を向上するための研修方法を検討することが必要である。

１－２－２　ペリネイタル・グリーフケア検討会

１．事業の目的

グリーフケアの実践を学び、地域連携の構築をはかることによって、ペリネイタル・グリーフケアの充実をはかる。

２．実施状況

・第 17 回　日時:平成 29 年 7 月 8 日(土)13:30～16:00　場所:石川県立看護大学
テーマ：「事例で学ぶ流産(中期)・死産・新生児死亡への対応のあり方」
講　師：地方独立行政法人　大阪市民病院機構　大阪市立総合医療センター
総合周産期母子医療センター　助産師　　大蔵　珠己　氏
スケジュール：導入(20 分)　赤ちゃんの死を考える
前半(40 分)　クループ内自己紹介
新生児死亡(医療)への対応　テーマ　「治療の差し控え」
グループワーク　→　発表
後半(65 分)　事例で学ぶ死産ケア
フォトムービー上映(5 分)　アンケート記入
参加者　48 名

・第 18 回　日時:平成 30 年 2 月 24 日(土)13:30～16:00　場所:かほく市七塚生涯学習センター
テーマ：「体験者の話を聴こう ～NICU での看取りのあり方と産科での関わり方を考える～」
講　師：体験者　大崎誠也・智絵ご夫妻
医療者　金沢医科大学　元 NICU 看護師　水口真理
スケジュール：導入(6 分)　紹介 DVD 視聴
前半(80 分)　講演　【体験者のお話】
【医療者のお話】
後半(60 分)【グループでの話し合い】　体験者・医療者への質問・感想等
【講師との交流タイム】
アンケート記入
参加者：34 名

３．実施内容

第 17 回

講師の大蔵氏は日総研のセミナーでも長年講師を務められている死産ケアのエキスパートである。自己紹介を含め、赤ちゃんの死の動向等をまず、導入としてお話くださった後、前半、新生児医療への対応として「治療の差し控え」について事例をもとにグループワークを行った。普段、深く話せない内容について意見交換ができ、とても有意義なグループワークとなった。休憩をはさんで、後半は事例で学ぶ死産ケアと題して、大蔵さんの多くのケア事例を写真とともにご紹介くださり、実際の話しかけ方等具体的ケア方法を学ぶことができ、参加者の満足度の高いものとなっていた。

第 18 回

最初に導入として、大崎氏が作成した紹介 DVD を視聴後、ご夫妻から妊娠中の様子から NICU での入院生活、看取り、退院後現在にいたるまでの状況と思いを 1 時間ほど語っていただいた。その後、そのときのケアも振り返りつつ、金沢医科大学病院での NICU でのケアの実際を紹介していただいた。講演後、休憩をはさみ、グループ毎に情報交換と講演をお聞きしての質問、

感想等を話しあっていただき、各グループからでた質問等に答えて頂き、交流を深めた。参加者の感想としては、「実際のご家族のリアルなお話を聞けて大変貴重でありがたかった」「体験者や他院の方のお話を聞けて、どういう対応がいいのか聞くことができた」等あげられており、今後のケアに活かせるとても有意義な会になっていた。今回、北陸放送の「元気日記」という番組が大崎ご夫妻を取材しており、この検討会の様子も一部放映された。

４．評価と今後の課題

昨年に引き続き、ペリネイタル・グリーフケアに関して、最先端をいく人々の話を聴くという企画は有意義であった。また、体験者の生の声を聴くということは貴重な体験となった。特に、普段あまり聴くことができない父親の気持ちにふれることができ、満足度が高かった。講演は一方向の講義形式のみではなく、グループワークも交え、施設間の交流があるということも満足度につながっていると考える。今回、テレビ番組が入ったことで、会の広報にもなったと考える。

来年度の企画でも医療者・貴重な体験者の話両方を聴きつつ、体験者との交流、施設間の交流にもつながるように企画していきたいと考える。

１－２－３　子育て支援・虐待予防に関する勉強会（事例検討等）

１．事業の目的

対応が難しい事例等の支援を共有し、意見交換することや、新しい支援方法等の理解を深めることを通して、参加者が新たな知識・視点・考え方を獲得し、それぞれの仕事に活かすことができることを目的として、本事業を実施している。

２．実施状況

平成 29 年度は 9 月～12 月まで 4 回実施した。事例提供者は小児看護専門看護師 3 名、小児救急看護認定看護師 1 名であった。

子育て支援・虐待予防に興味がある看護師、助産師、本学大学院修了生、大学院生、母性・小児看護学教員が参加して事例検討を行った。

開催場所は、教育研究棟 3 階会議室および、地域ケア研修室とした。

３．実施内容

実施の概要は以下の通りである。

第１回　9/14（木）18:30～20:00　事例提供者：小児看護専門看護師　松井弘美氏
テーマ：精神疾患をもつ親と暮らす子どもへのケア　参加者全 12 名

第２回　10/5（木）18:30～20:00　事例提供者：小児看護専門看護師　高橋久子氏
テーマ：精神症状を呈した自閉症スペクトラム障害児への調整
－入院生活、学校生活の維持を目指して－　参加者全 7 名

第３回　11/9（木）18:30～20:00　事例提供者：小児救急看護認定看護師　稲田早苗氏
テーマ：若年妊婦との関りを通して－今後の課題－　参加者全 16 名

第４回　12/9（土）10：30～12：00　事例提供者：小児看護専門看護師　羽場美穂氏
テーマ：末期状態で飛び込み入院した児への対応
－母の思いに沿った看護とは何かを考える－　参加者全 13 名

参加人数には、ややばらつきがあるが、確実に参加者がおり、今後 CNS を目指す看護者や大学院生にとっても、実践事例を学べる機会となっていた。事例提供者の提示テーマや対象が様々であり、毎回子どもと家族への支援について深く検討できる。それぞれのケアの技や、職種の連携についての知識が豊富な教員等の見識が融合し、支援の充実が図られていくことが期待できる。

４．評価と今後の課題

参加者の感想からは、日ごろの実践の振り返りができたという意見を得たり、支援についての新たな視点を持てたという感想が得られ、施設や職種を越えた交流、検討の成果が現れているといえる。

参加者のニーズを把握しながら、事例検討と専門職の講義併用も検討し、子育て支援・虐待予防にかかわる支援者のスキルアップに貢献していきたい。

１－２－４　がん看護専門看護師事例検討会

１．事業の目的

北陸 3 県のがん看護専門看護師の知識・技術をさらに高め、また、県内の看護専門看護師の後輩の育成につなげる。

２．実施状況

第 1 回（8 月 12 日開催）参加者は計 18 名であった。アンケート対象者 18 名にアンケート用紙を配布し、18 名より回答を得た（回収率　100.0%）

第 2 回（10 月 22 日開催）参加者は計 18 名であった。アンケート対象者 18 名にアンケート用紙を配布し、11 名より回答を得た（回収率　61.1%）

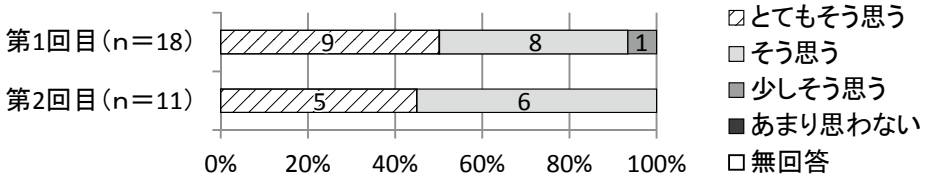
３．実施内容

以下のような自由記載の他に、アンケート結果では概ね、良好であるとの返答があった。

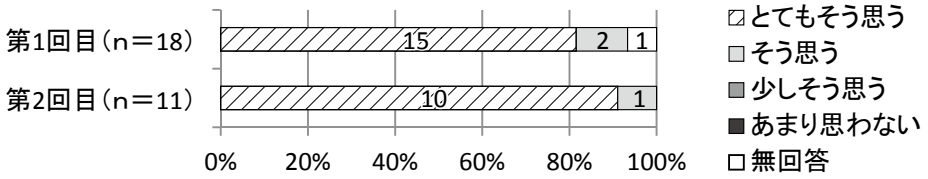
・本当の価値観に着目してレジリエンスを引き出すことはとても大切だと思いました。
・通常と違い CNS レベルの意見交換ができるよい時間だと思います。
・患者の気持ちに寄り添い信頼関係を築くケアやチームへの関わりはとても参考になりました。
・今までの振り返りにもなり、CNS としての周囲のスタッフへの洞察、人の見方、感じ方を深めていくことの学びとなりました。
・先生方から貴重なご助言をいただくことが出来てよかった。大変刺激を受けた。

１．事例検討会の評価について

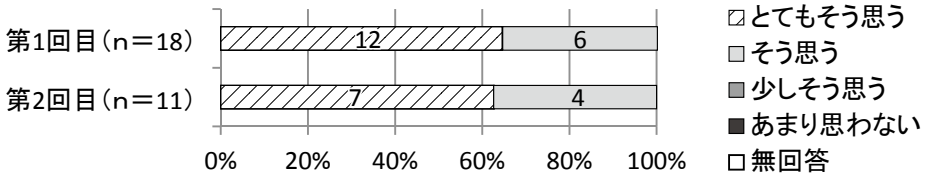
１）事例の内容は今後の CNS としての看護実践に活かされると思いますか



２）意見交換の内容は今後の CNS としての看護実践に活かされると思いますか

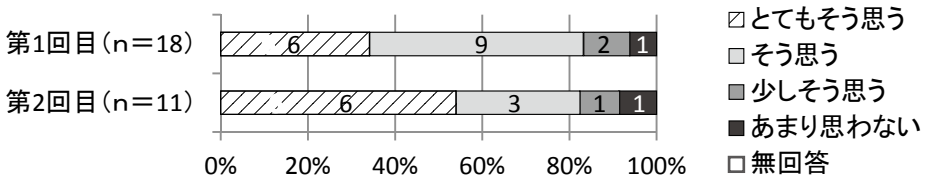


３）日頃のがん看護実践を振り返る機会となりましたか

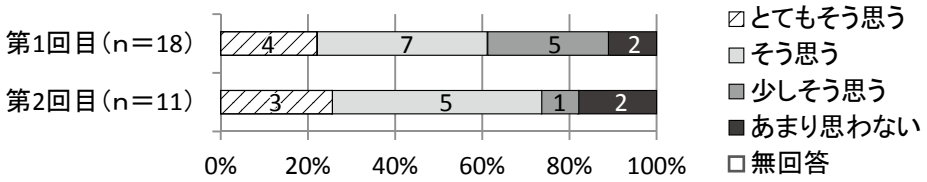


２．事例検討会への参加の仕方について

１）討議には積極的に参加できましたか



２）自身の経験を踏まえて意見などを述べることができましたか



４．評価と今後の課題

今年度から、新たに北信がんプロがはじまることになったため、今後は北信がんプロ企画が中心として継続していきたい。

１－３ 相談サービス事業

１－３－１　各種研修会等への講師派遣事業

分野別派遣回数

番号	1	2	3	4	5	6	
種類	病院等	職能団体 (看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係の 任意団体	その他	計
回数	33	0	6	1	0	1	41

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
1	助教 田村　幸恵	H29.5.18 13:00～17:00	独立行政法人地域医療機能推進機構 金沢病院	看護研究の指導・講評	独立行政法人地域医療機能推進機構 金沢病院	1
		H29.6.29 17:30～19:00				
		H29.8.2 17:30～18:30				
		H29.10.23 13:00～17:00				
		H29.12.18 13:00～17:00				
		H30.2.26 13:00～17:00				
2	講師 金谷　雅代	H29.5.27 9:00～12:30	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	看護研究指導・講評	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	1
		H29.6.17 9:00～12:30				1
		H29.9.30 9:00～12:30				1
		H29.11.25 13:30～17:00				1
3	助教 金子　紀子	H29.7	珠洲市総合病院	看護研究の指導・講評	珠洲市総合病院	1
		H29.10				1
		H30.3				1
4	講師 林　静子	H29.6.6 17:30～19:30	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	看護研究の指導	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	1
5	講師 川村　みどり	H29.6.16 16:00～17:00	公立宇出津総合病院	看護研修会講師	公立宇出津総合病院	1
		H29.12.1 16:00～17:00				1
		H30.3.2 17:30～19:00				1
6	准教授 木森　佳子 助教 松本　智里	H29.6.23 14:00～	公立能登総合病院	看護研究の指導・講評等	公立能登総合病院	1
		H30.1.20 8:30～12:30				1
7	准教授 谷本　千恵 講師 川村　みどり 助教 清水　暢子	H29.7.1 ～ H30.3.31	石川県立高松病院	看護研究の指導	石川県立高松病院	1
						1
						1

8	助教 大江　真吾	H29.7.4 17:30～19:30	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	看護研修会講師	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	1
		H29.7.5 17:30～19:30				1
		H29.7.11 17:30～19:30				1
		H29.10.3 17:30～19:30				1
		H29.10.4 17:30～19:30				1
		H29.10.5 17:30～19:30				1
9	助教 清水　暢子	H29.7.7 14:00～15:30	松岡福祉総合センター翠荘	認知症サポーター養成講座の講師	永平寺町社会福祉協議会地域包括支援センター	3
		H29.7.13 19:00～20:30	永平寺町役場永平寺支所			3
		H29.7.18 19:00～20:30	永平寺町やすらぎの郷			3
10	教授 西村　真実子	H29.7.10 13:00～16:00	石川県庁	児童福祉司養成研修講師	石川県健康福祉部 少子化対策監室	3
11	教授 丸岡　直子	H29.7.15 15:30～16:30	しいのき迎賓館	学都石川の才知 「人々の在宅療養移行を支援する看護師の役割」	大学コンソーシアム石川	6
12	講師 川村　みどり	H29.7.24 10:00～	石川県立看護大学	災害避難に関する指導	かほく市消防本部	3
						3
13	特任教授 浅見　洋	H29.7.28 18:00～19:30	市立砺波総合病院	緩和ケア講演会講師	市立砺波総合病院	1
14	助教 曽根　志保	H29.8.18 17:20～18:30	町立宝達志水病院	看護研修会講師	町立宝達志水病院	1
		H29.9.15 17:20～18:30				1
15	教授 牧野　智恵	H29.9.16 10:40～12:10	金沢大学附属病院	看護研修会講師	金沢大学附属病院	1
16	助教 堅田　三和子	H29.10.2 10:10～12:00	石川県庁	認知症看護実践力研修講師	石川県立高松病院	1
17	准教授 中田　弘子	H29.10.31 16:00～20:00	公立羽咋病院	看護研修会講師	公立羽咋病院	1
		H30.3 16:00～20:00				1
18	准教授 岩城　直子	H29.11.10 15:00～17:00	富山県立中央病院	看護研修会講師	富山県立中央病院	1
		H29.12.26 16:00～17:00				1
		H30.2.9 16:00～17:00				1
19	准教授 米田　昌代	H29.11.15 14:35～15:25	金沢市立泉中学校	助産師が行ういのちの出前授業」講師	石川県看護協会	4
		H29.12.8 13:30～14:20	金沢市立港中学校			
20	助教 磯　光江	H30.2.15 17:15～18:45	河北中央病院	看護研究発表会講評	河北中央病院	1
21	准教授 岩城　直子	H30.2.23 13:45～14:45	富山大学附属病院	新人看護職員研修	富山大学附属病院	1

１－３－２　病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）

地区/県	派遣病院名	指導内容	講師名		回数
金沢	独立行政法人地域医療機能推進機構　金沢病院	看護研究指導・講評	助教	田村　幸恵	6
	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	看護研究指導・講評	講師	金谷　雅代	4
	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	看護研究指導	講師	林　静子	1
		看護研修会講師	助教	大江　真吾	6
	金沢大学附属病院	看護研修会講師	教授	牧野　智恵	1
能登	珠洲市総合病院	看護研究指導・講評	助教	金子　紀子	3
	公立宇出津総合病院	看護研修会講師	講師	川村　みどり	3
	公立能登総合病院	看護研究指導・講評	准教授 助教	木森　佳子 松本　智里	2
	公立羽咋病院	看護研修会講師	准教授	中田　弘子	2
	町立宝達志水病院	看護研修会講師	助教	曽根　志保	2
	石川県立高松病院	看護研究指導	准教授 講師 助教	谷本　千恵 川村　みどり 大江　真吾	3
	河北中央病院	看護研究講評	助教	磯　光江	1
富山県	市立砺波総合病院	講演会講師	特任教授	浅見　洋	1
	富山県立中央病院	看護研修会講師	准教授	岩城　直子	3
	富山大学附属病院	看護職員研修講師	准教授	岩城　直子	1
					39

２　地域連携・貢献事業

２－１ 地域連携事業

２－１－１　来人喜人能登健康づくり支援事業

１．事業の目的

能登町は産業基盤が脆弱であり、かつ就学、就職時に若者が町外に流出し、少子高齢化、過疎化が急激に進行している。2010 年度の高齢化率は能登町の 40.1%、2035 年度予測は 52. 6%であり、生産年齢人口が高齢者人口を大幅に下回りつつある。それに伴って、地域住民の健康な生活を支えていた地域のシステム、伝統文化、コミュニティの絆、地域産業などが減退しつつある。そうした現状を踏まえると、能登町の最大の課題は少子高齢化と高齢者等の医療、介護である。その補完的な解決策として交流人口の拡大と健康に関わる社会的文化的な活動の強化が考えられる。本プロジェクトでは看護大学の特色を踏まえ、健康問題、特に健診率向上キャンペーンを展開すると同時に、運動と食事生活に関わる文化、社会活動において地域で活動する諸団体と連携、交流しながら住民の健康づくりをサポートする。

２．実施状況

5 月 7 日　「第 29 回猿鬼歩こう走ろう健康大会」に参加。健康キャンペーン実施。
10 月 28 日～29 日　石川県立看護大学学園祭にて「クライネメッセ」・能登フェア開催。

３．実施内容

・能登町健康福祉課、健康大会事務局、能登高校地域創造学科、能登町社会福祉協議会など能登町の連携団体と協力しながらその活動を支援することができた。
・歩こう走ろう健康大会では、大学から学生（16 名）、教職員および本学関係者（9 名）が参加し、地域間交流ができた。事前に「看護大かかし」を作成し、大会を盛り上げた。
・大会での健康キャンペーンでは、学生も健康チェックに参加し、大会参加者や地元住民との交流ができた（80 名）。大会に健康キャンペーンを継続して参加してきた結果、健康チェックの参加者が年々増加している。
・風船配りは、毎年の恒例となり、地元の園児、小学生との交流もできた。
・学生が「けんしん君」の着ぐるみを着て、特定検診・がん検診の受診を呼びかけた。
・能登町と看護大学が連携して住民の健康を支援するネットワーク基盤ができ、大会実行委員長より、次年度の参加の要望もあった。
・大学祭でのクライネメッセでは、ジェラード、能登野菜、能登牛丼の販売を通した能登地区の紹介を行い、かほく市民との交流ができた。また、能登高校の出店で、充実した能登のＰＲ活動ができた。
・看護大学の学生、教職員の能登への関心が高まった。

４．評価と今後の課題

・引き続いて住民の健康づくりに意義があると思う事業をこれまで培ってきた連携のネットワークを使って実施する。
・本事業とそこで育んできた枠組みを基盤として、本学が一つの目標とする「地域の健康づくりにアプローチできるグローカルな視野を持った人材を育成」（ヒューマンヘルスケア人材育成プロジェクト）に展開、発展させたい。

２－１－２　健康応援倶楽部・健康推進モデル事業

１．事業の目的

PC や携帯電話があれば、好きな時間に好きな場所からインターネットを経由して身体状態を入力できるシステム「毎日健康倶楽部」を構築している。このシステムによって、体組成、身体活動量、食事量を一元的に把握し、週単位での運動処方や食事指導などを継続的に行い、対象者が身体状況を入力してから、評価・アドバイスまでを短期間でフィードバックする双方向コミュニケーションが可能となっている。

２．実施状況

平成 29 年 6 月～平成 29 年 12 月
登録者 0 人

３．実施内容

平成 29 年度の健康応援倶楽部・健康推進モデル事業は、イオンの事業のため、参加者がなかった。

４．評価と今後の課題

今年度で打ち切りとする。

２－１－３　「ワクワク健康サークル」活動

１．事業の目的

「スモールチェンジ活動」とは、健康の維持・増進を目指し、①続けられる小さな行動から始める、②続けられたら行動のレベルを少し上げる、③続ける工夫をする、という段階的な健康づくりの手法である。本事業は、「スモールチェンジ活動」を通して住民主体の健康づくりの仕組みをつくるため、大学はそれを支援することを目的とする。

２．実施状況

看護大学近隣の市や町に住む者を対象に、毎月第３水曜日の 19 時～20 時半に健康教育を実施する。毎月のテーマを参加者が決め、教員と学生はテーマに基づく講義やグループワーク、デモンストレーション、体操を行う。

３．実施内容

4 月：テーマ「5 月病に気をつける」、参加者数 27 名
5 月：テーマ「室内で手軽にできる体操」、参加者数 23 名
6 月：テーマ「骨を鍛える」、参加者数 21 名
7 月：テーマ「静かな病　高血圧に気をつける」、参加者数 21 名
8 月：テーマ「体型を簡単にしらべる方法」、参加者数 16 名
9 月：テーマ「３S エクササイズはなぜ大切か」、参加者数 21 名
10 月：テーマ「誤嚥（ごえん)」、参加者数 18 名
11 月：テーマ「冬の過ごし方に気をつける」、参加者数 28 名
12 月：テーマ「今年の活動のふり返り」、参加者数 24 名
1 月：テーマ「今年の活動のふり返り」、参加者数 5 名
2 月：テーマ「ピラティスの体験」、参加者数 17 名

４．評価と今後の課題

毎月の活動を、着実に開催することができている。

２－１－４　棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり

１．事業の目的

高齢者が主体的に社会参加する、または互い支え合うという地域づくりの行為そのものは、高齢者自身の健康を維持・増進させることが明らかにされている。このことは、著しい人口減少と医療体制の脆弱さを抱える限界集落の活性化策としても注目されている。本事業は、限界集落を舞台に、地域資源である「食」「緑」「人」を活かした地域づくりを住民が主体的に行い、研究者や専門職者はそれを支援する体制を構築することを目的とする。

２．実施状況

看護大生は限界集落へ出向き、住民と交流を深める。協働する地域活動は、かぼちゃの農作業体験、住民の健康チェック、民泊体験、彼岸花の植栽（棚田の保全活動）、秋の幸せ収穫祭の開催、そば祭りの開催である。

３．実施内容

・4 月：集落の宝を探す意見交換会（参加者：学生 7 名、住民 13 名）
・5 月：住民の形態・体力測定（参加者：学生 11 名、住民 17 名）
・6 月：集落に伝わる昔遊び体験（参加者：学生 7 名、住民 15 名）
・6 月：かぼちゃの農作業体験（参加者：学生 7 名、住民 5 名）
・10 月：秋のしあわせ収穫祭（参加者：学生 11 名、住民 28 名）

４．評価と今後の課題

予定した交流地域活動は、おおむね行うことができた。一方、夏の天候不順のため、農作業に関するイベントを実施できなかった。

２－１－５　モールウォーキング事業

１．実施目的

モールウォーキング事業は、冬場の運動不足の解消を目的とした「か歩く健康ウォーキング」事業に、かほく市およびイオンモールかほくと連携して取り組み、参加住民の健康チェックとモールレッスンにおけるミニ講話等を行うことを目的としている。

２．実施状況

○歩数計活用型健康ウォーキングの事前健康チェック

8/21（月）～8/23（水）かほく市ほのぼの健康館

○か歩く健康ウォーキング事業開会式および健康チェック

開会式　9/1（金）10 時～11 時　　イオンモールかほく　センターコート

○モールレッスン

7/28（金）「身体とこころを癒す手のケア（ハンドケア）」

9/29（金）「ロコモを知って、いつまでも元気を目指そう！」

12/22（金）「認知症も生活習慣病の一つです！予防しましょう」

1/26（金）「ストレスとの上手なつき合い方」

○か歩く健康ウォーキング事業閉会式

閉会式　2/28（水）10 時半～12 時　イオンモールかほく　センターコート

○歩数計活用型健康ウォーキングの事後健康チェック

3/5（月）～3/7（水）かほく市ほのぼの健康館

３．実施内容および成果

歩数計活用型健康ウォーキングの登録者 239 名（継続 171 名、新規 68 名）に対して事前の健康チェックを教員のべ 38 名と学生のべ 28 名で実施した。事後の健康チェックは教員のべ 21 名と学生のべ 17 名で実施した。

モールレッスンではそれぞれ 120 名ほどの参加者があり、教員 4 名で対応した。

本事業の実施にあたり平成 29 年度 9 月に「石川県立看護大学健康づくり研究会」を教員９名で立ち上げた。そして平成 29 年度のデータを分析し、「産学官連携による健康づくり事業参加者の特徴と変化～運動習慣のない参加者に注目して～」を石川看護雑誌第 15 巻に資料論文として投稿した。

４．評価と今後の課題

いずれのモールレッスンにおいても平成 29 年度よりも多くの参加者があり、本事業が定着してきていることが実感された。

平成 29 年度データの分析結果を踏まえて、参加者個々の状態に併せた、よりきめ細かなプログラムを構築していく必要があると考える。

２－１－６ かほく市子育て支援学生ボランティア事業

１．事業の目的

かほく市は、日本一ママにやさしい街づくりを目指し、H27 年 10 月に、こども総合センターをオープンした。その子育て支援の拠点を会場に、本学の子育て支援に興味を持つ学生ボランティアとかほく市子育て支援課がタイアップし、事業企画をする。また、各種事業に参加したり、学生自ら企画した活動を実施する。このことより、学生にとっては実際的なこどもの発達や母子保健に関するニーズ等を学ぶことができる。また、かほく市の日本一ママにやさしい街づくりに看護学生として貢献することができることである。

２．実施状況

H29 年度に子育て支援の学生ボランティアサークルが発足し、活動を開始し、順調に活動を継続している。また、後方支援として、2 月に市保育士と本学学生（本学子育て支援学生ボランティア「子育て応援隊ひよっこのメンバー含む）を対象に、「こどもの心を育てる遊び」をテーマに研修会を開催した。

３．実施内容

１．ボランティアサークル活動

１）サークル名：看護大 子育て応援隊ひよっこ（黄色いエプロンを着用して活動中）

２）設立日：平成 29 年 5 月 29 日（月）

３）顧　問：林静子先生、副顧問：千原先生

４）メンバー： 19 名（2 年生：7 名、1 年生：12 名）※設立当初 27 名

５）活動状況

・7 月 2 日：イクメン事業　親子ふれあい遊びのボランティア（11 名）

・8 月～土／週：託児ボランティア（2～3 名）

・8 月 8 日：夏祭りのボランティア（2 名）

・9 月 28 日：わくわく運動会ボランティア（5 名）

・3 月：お誕生日会（2 名）

・10 月 28 日～29 日：大学祭で絵本の読み聞かせコーナーを設置（10 名程度）

２．研修会の開催

１）日　時：平成 30 年 2 月 24 日（土）、会場：大海保育園

２）対象者（参加者数）：かほく市保育士・本学学生　約 160 名

３）テーマ：こどものこころを育てる遊び

４）講　師：しらこばと幼稚園理事長・園長　菊地政隆氏（まあせんせい）

４．評価と今後の課題

当初より 1 年生が脱退したものの現在 19 名がサークル活動に参加している。参加した学生の感想としては、「毎回とっても楽しく参加している。そして大変勉強になる。今後も継続していきたい。」と述べている。託児ボランティアなどは、19 名で都合のよい日に２～4 名単位で参加しているので、無理がなく継続できているようである。

今後の課題は、今年度から開始した学生のボランティア活動が、かほく市の保育士や保育ママ達と連携しながら継続的な活動に繋ながるよう支援していくことである。

２－１－７　災害につよい街づくり事業

１．事業の目的

東日本大震災で被災された多くの住民が仮設住宅から災害公営住宅へとその生活基盤を変えようとしているのが現状である。しかしその地での新しい絆づくりという新たな課題が今まさに生じている。被災地およびかほく市それぞれの社会福祉協議会や関係団体と連携して、高齢化の進む地域の災害につよい街づくりに貢献したいというのが目的である。

２．実施状況

〇災害につよい街づくりフォーラム 2017

日　時：平成 30 年度 1 月 21 日（日）10:00～12:00

場　所：石川県立看護大学　大講義室　　参加者：約 140 名

内　容：

・「防災気象情報の利活用について」（金沢地方気象台・防災管理官・山下光信氏）

・「ペット防災について」（ペット防災指導員・元女明美氏）

・活動報告　　宇気地区、高松旭町、災害ボランティアサークルふたば

〇被災地学生ボランティア活動

日　時：平成 30 年 3 月 6 日（火）～3 月 8 日（木）

場　所：宮城県亘理郡亘理町

内　容：3 月 7 日（水）9 時半～13 時　一本松集会所　サロン活動

10 時～12 時　浜吉田北区集会所　サロン活動

13 時半～15 時半　西木倉災害公営住宅集会所　サロン活動、個別訪問

サロン活動：血圧測定、ハーバリウムづくり、百歳体操、茶話会ほか

16 時～16 時半　「亘理町の現状と課題」

亘理町社会福祉協議会・川端康裕氏

参加人数：学生 36 名、教員 3 名

３．実施内容

災害につよい街づくりフォーラムでは地元からの要望に応える形での防災気象情報に関する基調講演を実施した。平成 28 年度と同様に 140 名を超える地元住民の方に参加していただいた。

被災地学生ボランティア活動においては宮城県亘理町の一本松では 13 名、浜吉田北区集会所では 20 名の住民の参加があった。午後からは西木倉災害公営住宅集会所で 20 名の住民の参加があった。

亘理町社会福祉協議会からの要望により集団移転した一本松地区の集会所で初めてサロン活動を実施した。男性参加者が多くなごやかな雰囲気での活動となった。

また平成 28 年度に引き続き生活支援相談員の方と一緒に個別訪問させていただいた学生も一部あり、災害公営住宅のお部屋ではさまざまなお話を伺うことができた。

最終日は震災遺構である仙台市立荒浜小学校を視察した。

４．今後の取組予定

平成 29 年度も被災地学生ボランティア活動は亘理町社会福祉協議会の担当者や民生委員の方々のご協力もあり大変盛況に終えることができた。また亘理町社会福祉協議会の川端氏から

の東日本大震災から 7 年が経過し亘理町でも自立について改めて考える必要があるという話に、復興の難しさを感じる貴重な機会となった。

被災地で学んだことを地元に還元していくことを視野に入れながら活動を継続していきたい。

２－２ 生涯学習講座

２－２－１　あかちゃんをお空にみ送った方の自助グループに対するサポート活動

１．事業の目的

あかちゃんを亡くした方がアクセスしやすいような体制作りと会の広報、お話会開催によって、あかちゃんを亡くした方の自助グループ活動を支援する。また、個別相談体制、医療施設・行政との連携を強化していく。

１）お話会の運営をサポートする。

２）体験者、臨床、地域からの相談があった場合、4つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

２．実施状況　３．実施内容

①お話会開催　日時・場所

対象：あかちゃん（流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等）であかちゃんを亡くした方

回数	月日	時間	主催	場所	参加人数
第1回	H29. 4. 23（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第2回	H29. 6. 5（月）	10:00～12:00	小さな天使のママの会	津幡町福祉センター	5
第3回	H29. 7. 23（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第4回	H29. 10. 2（月）	10:00～13:00	小さな天使のママの会	津幡町福祉センター	5
第5回	H29. 10. 22（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	8
第6回	H30. 1. 28（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第7回	H30. 2. 5（月）	10:00～14:00	小さな天使のママの会	津幡町福祉センター	9

②適宜メール相談・電話相談・面談

2名の体験者とメールでのやりとりを実施し、お話会にもつないだ。現在、前向きな言動もみられており、よい状況になってきている。

③ひまわりの会　自殺予防活動

H29. 12. 3(日) 13:30～16:00　こころの健康づくり講演会　わたしたちが生き抜くために
石川県・かけがえのない命をまもるネットワークいしかわ(ひまわりの会所属)　主催

④体験者の話を聞く場:

H29. 7. 5(水) 13:00～14:30　母性看護方法論の講義枠で自助グループ代表者・メンバーの方に語っていただく。

⑤広報活動:各医療施設・行政の母子保健担当に年度始めに郵送した。また、不足したとの問い合わせに応じ、郵送した。

⑥全国のあかちゃんを亡くした方の自助グループ（天使がくれた出会いネットワーク）との情報交換:メールでの情報交換をしており、ホームページアドレスの更新を依頼した。

４．評価と今後の課題

例年と大きく活動の変化はないが、今年度もメールにて、新しい相談依頼があった。メールのやりとりの中で少しずつ、前向きになられる様子もみられ、ケアの効果を実感し、相談できる場の必要性を再認識した。

ちらしの送付希望があり、適宜送付した。ちらしが今年度でなくなりそうであるので、来年度に向けてちらしを作成していきたい。

ひまわりの会の運営方法が経済的に厳しくなってきており、専用携帯電話での相談を廃止することとなった。廃止しても、連絡体制に不備がないように考えていく。

２－２－２　どろっぷ・いん・さろん

１．事業の目的

子育てに悩みをもつ母を対象に、①エンパワーメント、②サポートし合う仲間づくり、③自分が取り入れられそうな子育て等のやり方・考えの獲得、④自分の客観視、⑤子育てへの不安や困難感の軽減、⑥レスパイト・ケアの６点をねらいとし、子どもと離れて過ごす場所の提供と、悩みについて安心して話せるグループミーティングなどを行った。

２．実施状況

1)どろっぷ・イン・るーむ(午前):託児を行い、母親には一人でまたは、他の参加者と自由に過ごす時間・場所を提供する。スタッフも母親の相談に対応する。

2)NP 親育ち・子育ちを考える会(午後):Nobody's Perfect 親支援プログラム(以下 NP)参加経験のある母親を対象に、託児を行い、NP 方式を取り入れたグループミーティングを行う。

スタッフ：西村真実子、米田昌代、金谷雅代、曽山小織、千原裕香、坂本洋子、
山田ちづる　院生他

回数	開催日	るーむ参加者	考える会参加者	託児児童数
1 回	H29.6.27 (火)	6 名	9 名	5 名
2 回	H29.7.25 (火)	5 名	10 名	9 名
3 回	H29.8.22 (火)	5 名	9 名	13 名
4 回	H29.9.12 (火)	5 名	8 名	5 名
5 回	H29.10.3 (火)	4 名	8 名	5 名

３．実施内容

「NP 親育ち・子育ちを考える会」で話し合われた主なテーマ

1 回目：自分の気がかりを話そう・みんなの気がかりを聴こう
2 回目：子ども・きょうだいへの関わり（しつけ等）
3 回目：自分の心の整え方
4 回目：実母・友達関係など人間関係について
5 回目：ママ友との付き合い方（SNS について）、子どもとの過ごし方

４．評価と今後の課題

・参加前と終了後の質問紙調査の結果より、子育ての自己効力感が上昇することがわかっている。自由記載の感想等から、同じような悩みを抱える仲間に受け入れられることにより安心感等が得られること(毎年参加者もいる)や、悩みや経験・考えをサポーティブに共有する話し合いを通して現実吟味/カタルシス/自分に取り入れられるやり方・考えの獲得等が起こり、日々の子育て等にプラスに働いていることが伺える。

・「親育ち・子育ちを考える会」は年間 5 回のみの開催であり、タイムリーな支援として web を活用した支援の可能性を検討していく。

２－３　ワンストップサービス事業

１．事業の目的

ワンストップサービス事業の目的は、石川県内の市町村、企業、NPO などの市民を対象とした地域貢献事業についての相談を受け付け、運営が円滑に行われるように支援することである。また石川県立看護大学が立地する地元かほく市の企業をはじめ、石川県内における看護・介護・福祉等の領域におけるさまざまな製品や用具の開発など、本学専任教員との共同研究について相談窓口を一本化し相談体制を整えることである。

２．実施状況

相談先	相談内容	対応
宝達志水町	宝達志水町の婦人会会員を対象とした健康セミナー開催に関する相談	桜井准教授 白内障、緑内障、網膜色素変性症など目のメンテナンスについての講演を実施した。

３．今後の課題

石川県内の自治体、関係機関等のニーズをよりきめ細かく把握するとともに、本学教員の研究テーマとのマッチングを行い、地域の課題解決に向けた取り組みをより充実させていく必要がある。

３　国際貢献事業

３－１　ＪＩＣＡ日系研修

「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース

この研修事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、石川県立看護大学と羽咋市社会福祉協議会が実施運営する。中南米日系社会支援の一環として平成 19 年度から開始され、平成 29 年度は 11 期目の研修生を受け入れた。11 期目からはボランティアを担う者ではなく、日本人会の幹部層を対象として実施することとなった。

１．研修目的

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護について講義で学びつつ、地域の病院や施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、高齢者福祉対策の組織的な対応を行うための仕組みや機能の重要性について幹部層の（知識と）意識の向上を促進する。

２．研修実施体制

（１）研修期間：2017 年 6 月 30 日～7 月 10 日
（２）研修員数：2 名　パラグアイ共和国　伊藤由美子氏（ラパス日本人会　事務局長）
パラグアイ共和国　幸坂　幸子氏
（イグアス日本人会　福祉ボランティア会長）
（３）研修場所：石川県立看護大学、羽咋市社会福祉協議会
（４）講　　師：川島和代　中道淳子（石川県立看護大学）
岩城和男　毛利浩　柳沢昌代　宮下陽江　中元美幸（羽咋市社会福祉協議会）

３．研修内容（別紙　スケジュール参照）

短期間の研修であることから、高齢化社会、高齢者福祉、ケアシステムをキーワードとした関連施設の視察と講義を取り入れたプログラムとし、高齢者福祉制度や日本の文化、ケアシステムなどを講義で学びつつ、地域の病院や施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、その実際について学ぶ。

４．研修目標・評価指標

（１）研修目標

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護について講義で学びつつ、地域の病院や施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、高齢者福祉対策の組織的な対応を行うための仕組みや機能の重要性について幹部層の（知識と）意識の向上を促進する。

（２）指標

帰国後、日系社会で高齢者福祉のシステムや人材育成に関して、個人的なスキルアップのみならず、組織的に今後ことについて取り組んでいくための具体的な活動を計画できる。

５．評価（総括）

（１）プログラムの妥当性

フォローアップ調査に参加した看護大学教員と羽咋市社会福祉協議会職員は講義・視察において、少しでも現地の実情に合わせた内容にしたいという思いをもって行えた研修であったため、研修員からの研修に対する評価は高かったと思われる。しかし、もう少しディスカッションする時間が欲しかったということであり、次回からは、ディスカッションの時間を確保した

研修期間・内容にしたい。そのためには、内容を関係者で協議後に見学先か講義を減らす必要があると考えている。

（２）研修時期、実施体制

研修員にとっては、あっという間の研修であった。開講式や閉講式の日を除くと、1 週間という短期間であり、午前にも午後にも講義や視察があった。梅雨の時期でもあり、同行していた担当者でも体力的に厳しいことがあったため、来日して体力を消耗していた研修員にとってはかなりのハードスケジュールであったと考えられる。研修員からは、来日してから来県するまでの日程がもったいなく感じると伺った。

研修期間中の講義室やパソコン等の機器の確保、研修運営に大きな混乱は見られなかった。実習施設を調整している羽咋市社協から施設の研修生受け入れについても概ね前向きな反応を頂いている。

（３）研修生の準備状態

今年度の研修生は両者とも高い日本語会話能力であり、日常会話での意思疎通は十分に図れた。カントリーレポートの発表も自国で仕上げてきており、研修最後の成果発表においても、各自がパワーポイントの資料や発表原稿を高いレベルで仕上げていた。

（４）自立発展性の観点から

日本人会幹部向けの 2 週間程度の視察型の研修を企画し、男性の参加を期待していたが、今回は女性の参加であった。今回のパラグアイからの研修生は日本人会事務局長と、福祉ボランティアの会長という立場であり、これまでのボランティアメンバーという立場よりは、広く高齢者福祉活動について自ら提言していく力をお持ちの方々であった。しかし、パラグアイ日本人会では男性が多くのことを決めていく立場にあり、是非男性幹部の参加を期待したい。

（５）日本社会への還元について

研修員には、様々な機会（看護大学の 2 年生の講義時間、地域の高齢者の集まりの場、認知症の人と家族の会の集まり）に、パラグアイ国や日系移住地の暮らしなどをご紹介いただいた。看護大学の学生からは学んだことを自主的にレポートした学生もおり、送別会の時に一部を紹介した。大学では講義の後に、茶道サークルの学生が七夕茶会を催し、研修員と積極的に交流し、国際的視野を広げることにつながった。

羽咋市では、歴代の研修員と交流がある「在宅介護者のつどい 楽だの会」の働きかけで、「認知症の人と家族の会　石川県支部（以下、家族会）」の会員と交流する機会を得た。交流会では本事業の概要説明と日系社会の活動紹介を研修員も行った。

大学や羽咋市といった限られた場ではあるが、パラグアイ共和国との国際交流ができた。

研修の光景（スナップ写真）

写真1　学長表敬訪問

写真2　開講式における研修生の挨拶

写真3　カントリーレポートの発表

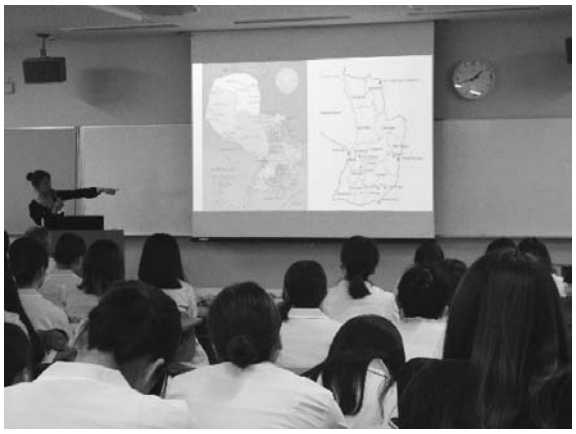


写真4 閉講式後、関係者と記念撮影

３－２　ＪＩＣＡ青年研修

「地域保健医療実施管理」コース

１．はじめに

JICA 青年研修事業は、発展途上国の人材育成を促進する目的で、将来の国づくりを担う若手人材を日本に招き専門分野の研修を提供するものである。2017 年にタイ王国 14 名の研修員を迎え「地域保健医療実施管理」コースが本学において実施された。

実施に際しての地域保健医療に関する問題意識としては以下である。

（１）　タイでは、経済の発展とプライマリーヘルスケアの推進により、乳幼児死亡率は改善し、それに加えて、合計特殊出生率が 1.4 人(2012)となり、少産少死社会へ移行している。また、平均寿命の延伸に伴い高齢化率も 10.5%（2015）となっており、日本を始めとする先進国と同様に高齢化が進み始め、2050 年には人口の 30%が 65 歳以上になると予測されている。そのため、少子高齢化がタイ国民全体の健康や社会の問題となってきている。

（２）　結核に関しては、2015 年のデータによると、罹患率は、171（人口 10 万人当たり、2014）であり、引き続き、結核に対する対策の充実が求められている。また、患者数の多い病気として、急性下痢症、食中毒、出血性結膜炎、デング熱などがあり、そのほかにもマラリア、寄生虫、性行為感染症の罹患も多く、感染対策や衛生環境整備が必要である。

（３）　栄養障害や感染症が減り、心疾患やがん患者が増加しており、最先端の医薬品、医療機器のニーズが高まっている。少子高齢化社会において健康寿命の延長に生活習慣病やがんの予防は大きな課題となっている。

（４）　医療体制においては、都市部と地方、富裕層と中下流層とでは医療格差が生じており、医療サービスのアクセス面で大きな違いがある。今後の充実が必要である。また、公立病院と民間病院の設備、サービスなども全く異なる。タイの保健医療水準を見る場合、地域の保健医療体制を整え、保健サービスの実行に向けて推進できる人材確保が課題である。

２．研修目標

将来のリーダーとして感染症ならびに生活習慣病などの予防医学・公衆衛生分野における課題解決を担う青年層の知識と意識の向上を目指し当該プログラムに参加することにより、以下の項目の達成を目標とした。

（１）予防医学、公衆衛生の概念を理解し、意識が向上する。

（２）予防医学、公衆衛生の向上のために、リーダーとしての必要な知識と意識が身につく。

（３）地域医療・保健のシステム、制度の重要性を理解し、自国の状況と課題に応じた予防活動を行うための基本的な考え方が身につく。

３．研修実施体制

（１）研修期間：2017 年 11 月 29 日～2017 年 12 月 12 日

（２）研修員：14 名の地域保健医療に携わる医療従事者、医療行政官、国際協力機関職員、医師２名、看護師３名、公衆衛生士３名、作業療法士２名、臨床心理士１名、児童施設ソーシャルワーカー1 名、国際協力機関職員１名、NGO 政策提言専門家１名）

研修監理員：2 名　橋本ロサリン・山崎裕司

（３）企画・実施担当(講師含む)

本学教員８名：石垣和子、川島和代、長谷川昇、岩城直子、塚田久恵、織田初江、桜井志保美、金子紀子

視察施設担当者 13 名：菊池修一、土田壽久（石川県庁健康福祉部）、長基明子（コメヤ薬局）、亀井淳平、小林淳二、石垣靖人、丹羽修（金沢医科大学病院）、卜部　健（公立松任石川中央病院）、橋本宏樹（公立つるぎ病院吉野谷診療所）、北西陽一（石川県南加賀保健福祉センター）、岡本佳代子（小松市予防先進部いきいき健康課すこやかセンター）、田畑正司（石川県予防医学協会）、谷村睦美（石川県保健環境センター）
事務局（地域ケア総合センター）１名：宮川泰生

４．研修内容

研修の全体概念図は図１、研修日程は表1に示すとおりである。

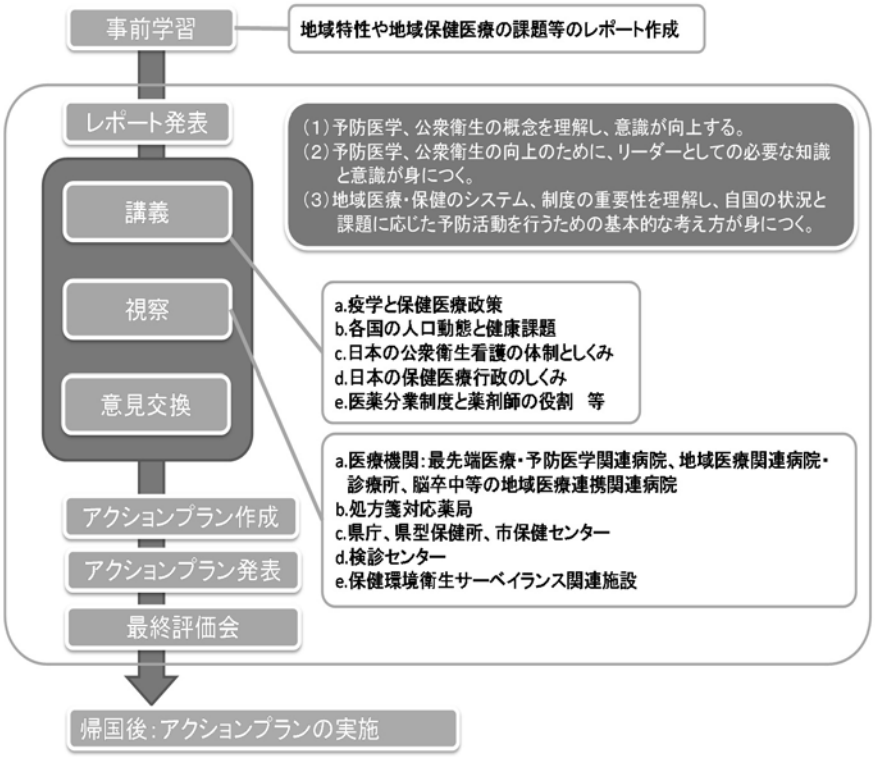


図1　2017年JICAタイ王国青年研修　全体概念図

表1　2017年JICAタイ王国青年研修「地域保健医療実施管理」日程表

月	日	曜日	午前		午後
11	29	水	9:10～9:30学長表敬訪問 9:30～10:30オリエンテーション 10:45～11:15　開講式	11:30～12:45 歓迎会(昼食兼)	13:00-16:00【講義】(織田) 疫学と保健医療政策
	30	木	9:00～10:30【講義】(川嶋) 石川県立看護大学における人材育成	10:40-12:10【講義】(桜井) 日本の訪問看護の現状	13:00～16:00ジョブレポート発表　(13:00～15:00) 終了後、大学内の案内
12	1	金	9:00-10:30【講義】(塚田・金子) 日本の公衆衛生看護の体制としくみ	10:40-12:10【講義】(長谷川) 医薬分業制度と薬剤師の役割	13:30～【ディスカッション】振り返りとまとめ(岩城・金子)
	2	土	自主研修		
	3	日	自主研修		
	4	月	9:30-11:30 【講義】(石川県健康福祉部) 日本の保健医療行政のしくみと医療保険制度について (引率:桜井, 宮川)		14:00-16:00 【講義・視察】(金沢医科大学病院) 最先端医療と予防医学(三次医療)の実際 (引率:桜井, 宮川)
	5	火	9:30-12:00 【講義・視察】(公立松任石川中央病院) 地域医療(二次医療)と地域医療連携(循環器・脳卒中等)の実際 (引率:桜井, 宮川)		14:00-16:00 【講義・視察】(公立つるぎ病院吉野谷診療所) 地域医療(一次医療)の実際 (引率:桜井, 宮川)
	6	水	9:30-11:30　【講義・視察】(石川県南加賀保健福祉センター) 公衆衛生活動の実際①保健所の役割と業務 (引率:岩城, 宮川)		13:00-14:30　【講義・視察】(小松市予防先進部いきいき健康課すこやかセンター) 公衆衛生活動の実際②市町保健センターの役割と業務 (引率:岩城, 宮川)
	7	木	9:00-11:30 【ディスカッション】振り返りまとめ(桜井) ＊理事長表敬訪問(武山)		14:00-16:00 【講義・視察】(石川県予防医学協会) 健診センターの役割と業務 (引率:桜井, 宮川)
	8	金	9:30-11:30　【講義・視察】(石川県保健環境センター) 保健環境サーベイランスの実際 (引率:桜井,宮川)		14:00-16:00 【講義・視察】(コメヤ薬局:視察場所吉野谷) 医薬分業の実際 (引率:桜井,宮川)
	9	土	自主研修		
	10	日	自主研修		
	11	月	9:00～12:00 【ディスカッション】(桜井) ブレーンストーミングをしながら、まとめていく作業)		13:00～16:00 【成果のまとめ】(桜井) ppt作成 17:00～【文化交流②】お茶会体験予定(茶道サークル)
	12	火	9:15～11:00アクションプラン発表	11:30-12:30　JICA評価会	12:30～13:00　閉講式、 13:00～14:00　送別会

５．研修評価

本研修は、前年度に実施されたプログラムを継承したものであり、短期研修で予防医学的な専門技術研修ではなく、予防、公衆衛生、地域医療、地域医療連携をキーワードとした関連施設の視察と講義を取り入れたプログラムとなっていた。前年度からの変更点は、前年度の研修員の意見を参考に、振り返りの時間を確保するために、訪問看護ステーションの視察を中止し、振り返り時間にあてた。また、カントリーレポートや研修 2 日目に行われたジョブレポート発表から、研修員が訪問看護や高齢者施設、発達障害児の対策について学びたい希望をもっていること、勤務先で事業計画などに携わっている研修員が多いことを把握したため、急遽、訪問

看護ステーションの講義、グループホームの視察、本学の教員による研究活動（成人・高齢者に対する健康づくり活動、発達障がい児に対する保健師の関わり）の紹介を、空き時間や振り返りの時間に組み入れ、視察先では特にシステムについて説明してもらうよう対応した。

ジョブレポート及びカントリーレポートなどからタイ王国の国内の健康課題として、高齢化に伴う介護の問題、生活習慣病の増加、感染症などがあげられ、その課題に取り組んでいくために、日本の高齢化対策、医療体制や予防医学、衛生管理の現状を知ってもらうことは、本研修の目的と合致するものであった。講義・視察とも、熱心に質問され、学ぶ意欲の高さを感じた。タイ語通訳 2 名体制であったため、同一施設内の複数のセクションの見学が可能になったことが、効率よく説明をうけ、より自国に合わせた具体的な質問につながったと考える。アクションプランでは、一人一人の研修生が、今回の学びをうまく取り入れ、帰国後に自国で研修生自身が実施可能な具体的な計画が立案されていた。本研修に対する研修生の満足度は高く、広く浅く学び、刺激を得、今後さらに深く学ぶ機会となったと思われた。

今回の研修員は、次世代の予防医学・公衆衛生分野における実施体制の課題解決を担う地域や国のリーダー的存在として、アクションプランで発表した計画をもとに活動を行うことが期待される。

JICA が実施した研修員からの評価の中から、本学の研修に関する項目については以下のとおりである。

1.あなたもしくは所属機関が案件目標を達成する上で、プログラムのデザインは適切だと思いますか

←適切である		適切ではない→		
点数	4	3	2	1
人数	8	6	0	0

2.研修期間は適切でしたか

点数	長い	適切	短い
人数	1	8	5

3.本研修の参加人数は適切でしたか

点数	多い	適切	少ない
人数	3	11	0

4.本研修において研修参加者の経験から学ぶことができましたか

←できた		できなかった→		
点数	4	3	2	1
人数	7	6	1	0

5.視察や実習など直接的な経験を得る機会が十分ありましたか

←十分あった		なかった→		
点数	4	3	2	1
人数	3	10	0	0

6.討議やワークショップなど、主体的に参加する機会が十分ありましたか。

←十分あった		なかった→		
点数	4	3	2	1
人数	4	7	2	0

7.講義の質は高く、理解しやすかったですか

←良かった		不十分だった→		
点数	4	3	2	1

人数	7	7	0	0

8.テキストや研修教材は満足するものでしたか

←満足した		満足していない→		
点数	4	3	2	1
人数	8	6	0	0

9.本研修で得た日本の知識・経験は役立つと思いますか

A：はい、直接的に活用することができる

B：直接的に活用することはできないが、業務に応用できる

C：直接的に活用、応用することはできないが、自分自身のためになる

D：いいえ、全く役立たない

点数	A	B	C	D
人数	3	9	2	0

４　そ　　の　　他

４－１　かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み

１．平成 29 年度の取り組み

平成 22 年 10 月に石川県立看護大学とかほく市が包括的連携協定を締結し、本格的な活動を開始して 7 年目を迎えた。

本年度は石川県立看護大学が幹事となり、２回の協議会を開催した。

6 月 3 日（金）第 1 回協議会：平成 28 年度の事業実績報告と平成 29 年度事業案について

12 月 12 日（月）第 2 回協議会：平成 29 年度事業の進捗状況報告と平成 30 年度の計画立案について

かほく市から継続 9 事業、新規 11 事業、石川県立看護大学より継続 3 事業を提案し実施された。

	かほく市主催事業	看護大担当	看護大主催事業
1	かほく市ケーブルテレビ事業（企画情報課）	垣花准教授	
2	健康ブランド化事業（健康福祉課、長寿介護課）	武山教授 垣花准教授	
3	いきいきシニア活動推進事業（長寿介護課）	塚田准教授	
4	地域支援事業（長寿介護課）	川島教授 塚田准教授	
5	介護予防サポーター養成講座（長寿介護課）	塚田准教授	
6	家庭介護者教室（長寿介護課）	桜井准教授	
7	かほく市体力テスト（生涯学習課）	長谷川教授	
8	問題を抱える子ども等の自立支援事業（学校教育課）	武山教授	
9	教育相談事業（学校教育課）	武山教授	
10	妊娠期から切れ目のない育児支援事業（子育て支援課）	西村教授	
11	まちかど交流館活性化（産業振興課）	川島教授	
12		塚田准教授	高齢者と看護学生との交流事業
13		塚田准教授 林講師	子育て支援学生ボランティア活動
14		武山教授	災害につよい街づくりフォーラム

「妊娠期から切れ目のない育児支援事業」は「地域少子化対策強化交付金事業」の後を受けて行うもので、出産前、乳児期、幼児期それぞれの母親を対象にペアレンティング・プログラム事業を展開し、育児に関する悩みや不安の解消を図るものである。

「まちかど交流館活性化」においては、かほく市が指定管理する「まちかど交流館」において、

館主催事業内で実施する健康チェックなどを契機に、地域住民が集い交流できる施設の利用促進を図るものである。

２．平成 30 年度に向けての事業実施についての検討

平成 28 年度に始まった「健康ブランド化事業」については、平成 29 年 9 月に「石川県立看護大学健康づくり研究会」を立ち上げ、多くの教員が継続的に関わって英知を結集させる枠組を作った。それを土台に住民の健康づくりにより有効な取り組みを構築していきたいと考えている。

長期にわたり継続されている事業については、その有効性を検証するとともに、今後のあり方について検討していきたいと考えている。

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事 業 報 告 書（第１５巻）

平成30年12月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター
〒929-1210
石川県かほく市学園台１丁目１番地
Tel.076-281-8308　　Fax.076-281-8309

Ⓒ 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

版権は石川県公立大学法人に帰属する。

印刷用の紙にリサイクルできます。